

# 初年次教育とキャリア教育のツールとしてのポートフォリオ 「今週の活動とトップニュース」の試行について

藤本 元啓\*

**The Use of Portfolios as a Tool for First-Year Experience and Career Education Programs  
: A Trial of “Weekly Activity Report and News of the Week” Portfolio**

by

**Motohiro FUJIMOTO\***

## 要 旨

初年次学生を対象に、基礎的・汎用的能力向上のスタートとして、1週間単位の学修生活の記録と興味をもった新聞記事に対する自己見解とを一括入力するポートフォリオ「今週の活動とトップニュース」を試行している。これは初年次教育とキャリア教育とを一体化したプログラムのツールで、エビデンスにもとづく自己評価と相互評価によって振り返りを誘発し、自己管理、社会とキャリアへの関心、学修意欲等の促進を目的とする。2017年度の導入と翌年度の全面電子化を目指して、その経緯と概要とを報告する。

**Key Words:** 初年次教育、キャリア教育、ポートフォリオ、基礎的汎用的能力

### 1. はじめに

大学初年次学生について、基礎学力、学修意欲、自己管理、進路意識、社会への関心、社会常識などの低下や欠如が指摘されてから久しい。このような状況に対して、2013年度には全国690の大学が初年次教育において多様なプログラムを展開している（文部科学省，2015）。なかにはリメディアル教育として中等教育、まれに初等教育レベルの内容を実施する大学もある。問題はこれらが効果的に上級学年に接続し、成果を挙げているかであるが、今日に至るまでその具体的な成果報告は管見に及ばない。

しかし東京大学の大学経営・研究政策センターが2007年に実施した「大学教育の成果に関

する学生の自己認識」（東京大学，2008）に関する報告は気がかりである。これによると、「大学の授業は、どのくらい役立っていると思いますか。また自分の実力はどの程度あると思いますか」との設問に対して、【表1】の各項目について興味深い回答がある。

設問の項目によっては異なるが、約30～60%の学生が授業は「役立っていない、あまり役立っていない」と回答し、約60～80%の学生が自分の実力は「不十分、やや不十分」と認識している。とくに全項目にわたって、後者が前者を上回っていることは、学生はこれらの項目について思いのほか自信を抱いていないことに留意すべきである。その原因は授業が理解できないのか、理解できても実践不足なのか、あるいはそのほかにもあろうが、この調査では明らかにできない。

---

\*崇城大学総合教育センター教授

ただこれらの項目には「人にわかりやすく話す力」「ものごとを分析的・批判的に考える力」「問題を見つけ、解決方法を考える力」「幅広い知識、もののみかた」など、基礎的汎用的能力（①人間関係形成力・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力）に含まれるものがある。調査当時はアクティブラーニング実施があまり叫ばれていない時期であったことを考慮すると、案外実践不足にあるのかもしれない。

【表1】全国大学生調査2007年  
東京大学大学院 大学経営・政策研究センター

	これまでの授業は				自分の実力は			
	役立っていない		役立っている		不十分		十分	
将来の職業に関連する知識や技能	9.5%	29.6%	42.4%	17.2%	30.0%	50.6%	15.4%	1.3%
専門分野での知識・理解	4.7	23.8	49.5	20.5	25.1	51.3	19.3	1.4
専門分野の基礎となる理論的理解・知識	4.5	24.0	48.7	0.8	22.3	49.7	22.6	2.0
論理的に文章を書く力	16.6	38.9	32.3	10.6	28.3	42.2	23.2	3.3
人にわかりやすく話す力	20.2	40.5	29.2	8.6	28.5	43.1	21.7	3.8
外国語の力	25.7	36.6	26.5	9.7	44.0	35.7	15.0	2.5
ものごとを分析的・批判的に考える力	9.2	35.2	42.0	11.9	16.5	43.6	31.0	5.9
問題を見つけ、解決方法を考える力	9.9	37.7	40.5	10.2	18.1	47.0	27.6	4.4
幅広い知識、もののみかた	7.6	30.4	44.9	15.6	7.6	30.4	44.9	15.6

恐らくこの実態は多くの大学が内包する共通の課題であり、その対処法として初年次教育をスタートとして上級学年につなげるシステムを模索し実施することになるが、各大学の悩みはそのプログラム、コンテンツ、実践および上級学年科目との接続連携とにある。

崇城大学（以下、本学）も同様の問題を抱えており、その対策として1～3年次に基幹キャリア教育として、必修9科目、選択6科目を配当している。これは狭義のキャリア科目でキャリア形成を図るものではなく、初年次教育を含めた、より広義の教育分野として設定されている。

そのスタート科目が1年次必修の「キャリア基礎Ⅰ」である。科目の詳細は辻田（2016）に譲るが、その授業形態はチーム討議、発表、他チームの発表評価を行うPBL型授業で、基礎

的汎用的能力の項目を一応網羅した学修活動である。

まずプレ活動として科目担当教員が与えるテーマ群から発表タイトルを決定し、ブレインストーミングとKJ法を活用してチーム討議を行い発表（ポスターもしくはパワーポイント）する。次に本番の発表として、所属学科から専門の香りがする程度のテーマが複数提供されプレ活動と同じスタイルで討議・発表するが、前者と異なり学科教員が発表会に出席しコメントを発言することに特徴がある。つまり、初年次教育・キャリア教育担当者と専門課程教員との協働で運営しており、教育方略の専門科目への接続にその狙いがある。

しかし本学の基幹キャリア教育科目群および科目の配当年次や内容を勘案すると、教育目標、学修達成目標、教育方略などは科目担当者に任されており、基幹キャリア教育全体としての整合性、接続性、カリキュラム上の位置づけには検討の余地がある。少なくとも基礎的汎用的能力の向上、とくにキャリア形成上不可欠な「社会への関心」と「自己管理能力」を高めるきっかけづくりとそれらの向上を教育目標（学生の達成目標でもある）とした内容への設計変更は急務である。

そこで本稿では、これらの目標を学生が達成するためのツールとして、2017年度から「キャリア基礎Ⅰ」に導入予定で現在試行中であるポートフォリオを紹介しておきたい。

## 2. 社会への関心づくりのための新聞活用

まず社会への関心度を高めるための教材として、新聞の有効性を述べておこう。新聞を教材として活用するNIE（Newspaper In Education）の活動はよく知られている。その報告によると、新聞活用後の児童・生徒が、①思考力、判断力、表現力、②言葉の力やコミュニケーション、③社会をつくり、それを動かす人間への関心、などについて効果があったという（NIEHP, 2009）。

一方大学でもNIE活動は広がり、例えば専門科目の導入、社会を知るためのきっかけ、あ

るいは基礎学力とくに日本語表現の基礎など工夫が凝らされている。筆者も新聞を教材に使い、①個人ワーク、②ペアワーク、③チームワーク、④プレゼンテーションを行うことによって、学生が文章読解力、調査能力、コミュニケーション能力などの向上や、社会と専門領域への関心度が高まると期待して、2015年度に1年間ではあるが、前任校の金沢工業大学（以下、KIT）で「現代社会と時事問題」（2年次選択）を実施したことがある。それは学生の「基礎的汎用的能力」の向上につながるものと考えたからでもある。

しかし片桐（2006）が実施した新聞に対する意識調査によると、新聞をよく読む学生の割合は15～20%であるという。若者の新聞離れにはそれなりの理由があり、片桐は①テレビ、インターネットなど他の媒体から情報を得る、②面倒くさい、③購読経費がかかる、などを挙げている。

報告者はインターネットの日常的な使用がはるかに広がった現在の学生がどのような状況にあるか、担当科目「キャリア基礎Ⅰ」（ナノサイエンス、建築、情報、応用生命科学科、各1クラス、計289名）において以下の調査を行った。なお他の調査と比較するために、2005年の朝日新聞社と2007年の某大学との調査結果（的地、2008）をあわせて【表2】に並列しておきたい。

【表2】新聞に関する大学生へのアンケート

		朝日新聞社 166名 2005年	某大学 スポーツ系 77名 2007年	崇城大学 理工学系 289名 2016年
今日、新聞を読みましたか	はい	30%	1%	9%
	いいえ	70%	99%	91%
新聞をどれくらいの頻度で読みますか	毎日	21%	1%	2%
	ほぼ毎日	27%	8%	3%
	ときどき	43%	62%	39%
	読まない	9%	29%	56%
社会ニュースをどこから得ていますか	テレビ ラジオ	66%	83%	複数回答 59%
	インター ネット	17%	16%	複数回答 56%
	新聞	11%	3%	複数回答 3%
	雑誌	2%	0%	複数回答 2%

朝日新聞社の調査は、東京多摩地区のネットワーク多摩（国公私立、短大42大学）で開催された「記者たちの講義」への参加学生を対象としたものであるためか、某大学と本学に比べて新聞を読む頻度は高い。また本学における2016年の調査では、複数回答ではあるが社会ニュースを得る媒体としてインターネットへの依存度は高くなっている。社会ニュースにアクセスする頻度そのものが高いかどうかはわからないが、総じて紙媒体の新聞を読む頻度は一層低下しているものとみざるをえない。

新聞は分野別に紙面を構成し、重要なニュースは紙面のトップに掲載され、さらに記者（新聞社）による見解（賛同、批判など）がまとめられており、読者の思考を深めさせる機能をもっている点で有益である。近年、新聞各社がインターネットで新聞を無料・有料で配信しているが、読者がニュースを記録するには印刷しなければならず、紙媒体の新聞にはかなわない。

このように学生の新聞離れは活字離れとも通じており、初年次教育では「日本語基礎」「日本語表現」などの科目が開講され、教育産業界ではこれを後押しするかのように「日本語文章検定」「語彙・読解力検定」などが考案され大学との提携が進んでいる。これらの水準についてどうこういうものではなく、需要度が高いという学生の実態を知るべきであろう。ともあれ、新聞が教材として有効であることは、各大学の取り組みや2014年の「大学NIE研究会関西」の発足にみることができる。

教材としてこのような有効性を持ち、しかも現実的素材を提供してくれる新聞を、学生が普通に読む習慣づけのツールとして考案したのが、次に述べる「新聞ポートフォリオ」である。

### 3. 新聞ポートフォリオ

このポートフォリオはキャリア教育の一環として、学生に社会と専門領域への関心度を高めさせるために、また読解力と要約力とを向上させるために、筆者が2013年にKITで考案した学修ツールのeポートフォリオで、授業で作成するものではなく毎週の課題として使用した。

KIT での入力項目は、1週間毎日新聞を読み、その日ごとに関心を持った新聞記事の①月日、②新聞見出し、③新聞名称・ページ、④感想(50~100文字)、⑤今週のトップニュースの要約(3項目にまとめる)である。

このeポートフォリオを、「修学基礎A・B」(1年次必修2単位×2)、「技術者と社会」(2年次必修2単位)、「技術マネジメント」(3年次必修2単位)においては学期中5週間程度、「現代社会と時事問題」(2年次選択2単位)では15週間実施した。つまり1科目だけで完結するのではなく、1~3年次を通して運用したことに特徴がある。

本学版はそれをアレンジした【図1】の紙媒体を用意し、KITの④内容・要旨を100文字程度、⑤自己見解(批評)を200文字程度に変更し、1週間のうち1記事は所属学科の領域に関する記事を挙げることを条件として「キャリア基礎I」の課題(宿題)として3週間連続で試行した。

新聞ポートフォリオ					
学号:		番号:		氏名:	
月/日	曜日	見出し、新聞名、ページ(画)	記事の内容・要旨		
上記記事の内、とくに印象に残ったものについて、自身の見解を述べなさい。該当記事に○印をつけること。					
( 文字 )					

【図1】新聞ポートフォリオ(崇城大学版)

なお両大学とも紙媒体の新聞を奨励したが、購読経費や学内配置の新聞の部数制約等を考慮して新聞社の無料電子版使用も認めた。

KIT 1年次生(「修学基礎A・B」)に「新聞ポートフォリオの作成は、世の中の出来事に関心を寄せ、大学での学びや進路を考える上での基礎的な知識を身につけようとするものですが、あなたにとって有益でしたか」とのアンケートを採ったところ、大変有益・有益の回答が85%を超える結果となった(【表3】)。本学でも

75%の学生から同様の回答を得ており、その有効性を確認できよう(【表4】)。

なおKITにおいて1年次には全国紙・地方紙を読む学生がほとんどであったが、2年次以降は科目担当者の指導もあるが経済や工業関係の業界新聞を読む学生が目立つようになり、自身の専門領域への関心が高まったことは、キャリア教育の成果として捉えることができるのである。

【表3】新聞ポートフォリオの有益度(1年「修学基礎」金沢工業大学)

	大変有益	有益	あまり有益でない	無益	回答数
2013年度前学期	23.1%	62.0%	12.3%	2.6%	1288
2013年度後学期	20.4%	66.8%	10.7%	2.1%	931
2014年度前学期	25.0%	62.8%	11.2%	1.2%	1124
2014年度後学期	23.8%	63.4%	10.7%	2.1%	820
2015年度前学期	25.4%	62.2%	10.8%	1.6%	1237
2015年度後学期	24.4%	63.5%	10.3%	1.8%	843

【表4】新聞ポートフォリオの有益度(1年「キャリア基礎I」崇城大学)

	大変有益	有益	あまり有益でない	無益	回答数
2016年度前学期	11.1%	63.9%	17.7%	7.3%	289

次に「新聞ポートフォリオ」に肯定的な回答をした本学学生の理由を紹介しておきたい。予想通り多かったのは、新聞を読む・ニュース番組をみるきっかけ、社会の動きがわかる、視野が広がり知識が深まるなどであった。なかには、自己見解による考える力・文章表現力、情報の収集力・判断力、問題発見力などの向上、世の中の動きに敏感になった、家族と記事について会話するようになった、新聞はテレビやインターネットにない情報の宝庫など、予想を超えた理由も多々あったことは嬉しい限りである。

一方否定的な理由として、要約することが面倒、20頁以上もある紙面から情報を探すのは難しい、他のメディア媒体が検索も楽で情報量も十分などがあった。なかには新聞は縦書きで読みにくいとあったが、これは理工系学生ならではの指摘であろうか。

このような状況と経過を経て、筆者の担当ク

ラスでは、この「新聞ポートフォリオ」の作成で得た情報をチーム討議に接続して、学生が発表テーマを構想・決定する手法に転換した。つまり「テーマ（問題）」は「与えられる」ものではなく、自ら「考え（発見し）」て「発表（解決）」するという一連の学修形態を学生が実践するためのスタートポジションと位置づけたのである。

テーマの決定方法を敢えて教示せずチームに任せたとこ、メンバーが各々関心事を報告した後、合議、多数決あるいは報告自体を点数化するなどして、独自の方法で決定したチームが少なくなかった。さらに発表概要の設計、そのための情報収集、役割分担、時間的制約を含めた工程を検討するなど、チーム討議が能動的学修の体験の場となったことは疑いない。

#### 4. 今週の活動とトップニュース

いまひとつ初年次教育・キャリア教育で重要なものに自己管理能力の向上がある。自己管理の内容は様々だが、1週間の振り返りによる自己認識、達成度確認、時間管理、健康管理などをコンパクトに整理でき、担当教員によるフィードバックをとともなうツールとして、2004年度からKITにおいて実施したのが【図2】のeポートフォリオ「1週間の行動履歴」である。

【図2】「1週間の行動履歴」（金沢工業大学版）

このeポートフォリオの成果については、これまでいくつかの論稿で報告している（藤本，2010a，2010b，2011，2012，2013，2015，

2016）、簡潔に紹介しておきたい。

eポートフォリオ運用の当初、全体的には以下の6項目に期待を抱いていた。

- ① 修学・生活の自己管理と分析
- ② 自己評価の文章化による自己表現力
- ③ 次年度の目標と行動設定
- ④ 修学アドバイザーによる迅速な修学指導
- ⑤ 保護者会個別懇談手元資料
- ⑥ 実在修学モデルの提示

これらの達成度を定量的に測る手段をいまだ持ち得ないが、達成しつつあると判断している。

次に学修面の成果については、次の3件で定量的な成果を挙げることができる。

- ① QPA（Quality Point Average）と称している GPA（Grade Point Average）は、2年次終了時に数値が下がる中だるみが一般的であり、その後に持ち直して卒業する傾向にあるというが、これに反してポートフォリオ開始2004年度の入学生から2年次末の QPA が2012年度を除いて上昇し卒業していく結果が顕著であること（【表5】参照）

【表5】金沢工業大学の入学年度別 QPA の推移

	1年次	2年次	3年次	4年次
2001年度	2.19	↓2.09	2.17	2.30
2002年度	2.18	↓2.14	2.21	2.34
2003年度	2.31	↓2.23	2.26	2.36
2004年度	2.24	↑2.30	2.43	2.48
2005年度	2.35	↑2.39	2.44	2.50
2006年度	2.33	↑2.38	2.47	2.54
2007年度	2.33	↑2.40	2.50	2.56
2008年度	2.29	↑2.42	2.45	2.53
2009年度	2.36	↑2.42	2.45	2.53
2010年度	2.38	↑2.41	↓2.40	2.48
2011年度	2.48	↓2.44	2.44	2.53
2012年度	2.36	↑2.41	2.52	
2013年度	2.45	↑2.46		
2014年度	2.51			

ポートフォリオ運用開始

★数字は各年次末までの累計平均値、最大値は4.00  
 ★2012年度に成績評価基準見直し  
 は2012年度数値

- ②数理工教育研究センターや夢考房の利用  
学生数が格段に増加したこと
- ③「褒めの教育」の一環である「学長褒  
賞」の受賞延件数が、ポートフォリオ導  
入前年の3,000件弱から完成年度の2007  
年度には9,000件を超え実に3倍にも増  
加したこと

このような状況は、学生の意欲と行動、そし  
て主体的な学びの姿勢が着実に培われているも  
のとみてよいであろう。

しかし「新聞ポートフォリオ」と「1週間の  
行動履歴」との併用は、作成する学生とフィー  
ドバックをする教員の双方に過重な負担がある  
ことをKITで経験したことから、本学では両  
ポートフォリオを一体化した【図3】の紙媒体  
の「今週の活動とトップニュース」を試行した。

今週の活動とトップニュース		番号		氏名			
月/日	今日のニュース 見出し/動向	自学自習(予習・復習・宿題・O/W実施)の内容 全時間数/合計時間数	課外活動内容(チーム学習、クラブ・サークル、 習い事、ボランティア、アルバイト等)/時間数	朝 食	昼 食	夕 食	睡眠 時間
今週のトップニュースの見出し/概要		合計					
トップニュースの字数(300文字程度程度許可)							
今週の達成度評価、成果(頑張った・良かったこと)、出席状況、反省(学習・生活)、次週の課題等について(300文字程度)							
教員コメント							

【図3】今週の活動とトップニュース(崇城大学)

記述項目は、

- ①今週の目標(達成可能な直近の目標)
- ②毎日の新聞で興味を抱いた記事の見出し
- ③今週のトップニュース(前項②の中で特  
に興味を持った記事の概要50文字程度)
- ④前項③の批評200文字程度(感想不可)
- ⑤毎日の自学自習内容(授業以外:予習、  
習、宿題、チーム学習、資格、教養読書  
など)と時間数
- ⑥課外活動の内容(クラブ、サークル、習  
い事、ボランティア、アルバイトなど)  
と時間数
- ⑦朝昼夕食の摂取の有無

## ⑧睡眠時間数

⑨今週の達成度200文字程度(成果、出席  
状況、反省、次週の計画、質問など)  
の9項目である。

なお時間的な制約で試行が1回に止まり記述  
式のアンケートを採れなかったため、学生の評  
価は以下に口頭での感想を挙げるにとどめる。

「新聞ポートフォリオ」よりもこちらの方が1  
週間の自分自身がわかり、何が不十分であつた  
か、さらにその原因まで認識できる上に、「新  
聞ポートフォリオ」の要素もあるため社会の動  
きにも対応できると好評の声が多かったことは、  
効果的であったものと考えている。

このポートフォリオの継続的活用によって、  
巨視的には、学生は学修のエビデンスにもとづ  
く自己評価と教員評価とによって振り返りを誘  
発し、無意識のうちにPDCAサイクルを回し  
て、学修意欲を促進することになる。

具体的には、以下の5項目に有効性があるも  
のと期待している。

- ①今週の行動目標と修学生活の自己管理  
(自立と自律への第一歩)
- ②社会への関心(キャリアデザインの第一  
歩)
- ③短文ではあるが自己評価の文章化による  
自己表現力(文章力とエントリーシート  
への接続)の向上
- ④チューターによる迅速な修学指導(学生  
定着)
- ⑤保護者会個別面談の手元資料(成績以外  
の話題提供)

## 5. おわりに

このようなeポートフォリオの運用は、前述  
したように筆者がKITで考案し、2004年度か  
ら実施したものであるが、多くの教職員の理  
解と尽力とによって一定の成果を上げたもの  
であり、本稿の紙幅をお借りして各位にあらため  
て敬意を表したい。

これを本学で行うことは二番煎じの感がない  
わけではないが、KITのポートフォリオシステ  
ムは汎用性を求められた「特色ある大学教育



ログラム」(特色 GP)として2006年度に採択されたものであり、筆者は延べ100を超える大学に紹介説明してきた(金沢工業大学, 2009)。事実これまでに、多くの大学で多様な目的をもつ独自のeポートフォリオが開発運用されている。本学でもKITのシステムを参考にしつつ、サイズと実情とに合った電子版の「SOJOポートフォリオシステム」(仮称)の構築と運用とを計画中である。

また本学では2017年にキャリアセンター(仮称)の設立が決定している。このセンターは基幹キャリア科目群を中心としたキャリア教育とキャリア実践教育、そして就職活動支援を担当する就職課と一体化した機能を有するもので、カリキュラムを横断するキャリア教育: CAC (Carries Across the Curriculum)、つまりすべての教育課程をとおして行うキャリア教育の拠点となるはずである。

本センターは近い将来の達成目標として、以下の項目を考えている。

- ①シラバス記載の学生の到達度目標(達成目標)について、達成度(%)とその理由を入力するポートフォリオ「各科目の学修達成度評価」による科目ごとの学修の振り返りとキャリアデザインとの関連の認識
- ②ポートフォリオ「今週の活動とトップニュース」に1~3年次の年度末報告書「各学年の達成度評価」ポートフォリオの作成を連動し、学生が教員とともに自身の経年評価を相互確認し、次年度の新たな行動目標を設計できるキャリアデザインの連続性
- ③ポートフォリオの集大成ともいえる自己成果データベース作成とそれをもとにした就職活動とその支援
- ④卒業後もキャリアデザインを実践・管理できる能力、つまり川嶋(2011)が唱える「キャリア管理力」の育成

本稿で紹介したポートフォリオの運用は、これらを実践するための「はじめの一步」であり、初年次教育とキャリア教育とを通したエンロールメント・マネジメント実施の試金石になるも

のと考えている。

## 参考文献

- 藤本元啓(2010a)「初年次教育と修学ポートフォリオ」『大学時報』, 332
- 藤本元啓(2010b)「KITポートフォリオシステムとキャリア教育」『大学教育と情報』, 131
- 藤本元啓(2011)「自己成長型教育—アクロノール・プログラム—」『私学経営』, 435
- 藤本元啓(2012)「KITポートフォリオシステムと修学履歴情報システム—金沢工業大学のポートフォリオ活用について—」小川賀代・小村道昭(編)『eポートフォリオ』東京電機大学出版局
- 藤本元啓(2013)「ポートフォリオ」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』世界思想社
- 藤本元啓(2015)「主体的な学びをはじめのためのポートフォリオ」『主体的学び』3号, 主体的学び研究所
- 藤本元啓(2016)「金沢工業大学の初年次教育とeポートフォリオ」『IDE現代の高等教育』579
- 金沢工業大学(2009)『平成18年度特色ある大学教育支援プログラム報告書』学ぶ意欲を引き出すための教育実践—KITポートフォリオシステムを活用した目標づくり—
- 片桐雅義(2006)「大学生の新聞に対する態度」『宇都宮大学国際学部研究論集』22号
- 川嶋太津夫(2011)「キャリア教育の背景とその在り方」『大学教育』33-1
- 的地修(2008)「大学のNIE(Newspaper In Education)を考える」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』5号
- 文部科学省(2015)「平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1341433.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1341433.htm)) 2016年9月21日閲覧
- NIE活動HP(2009)「第5回NIE効果測定調査」財団法人日本新聞教育文化財団博物館・NIE委員会 ([http://www.nie.jp/research/pdf/re5\\_201007.pdf](http://www.nie.jp/research/pdf/re5_201007.pdf)) 2016年9月25日閲覧
- 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター(2008)『全国大学生調査第1次報告書』pp. 159
- 辻田祐純(2016)「高校教育から大学教育へ必修科

目としての初年次から取り組むアクティブラーニング』『第64回九州地区大学教育研究協議会議事録』

なお本稿は2016年9月3日に鹿児島大学において開催された「第65回九州地区大学教育研究会」の「初年次・キャリア・学際部会」で報告した「初年次教育・キャリア教育のツールとしてのポートフォリオ『今週の活動記録（仮称）』の試行について」を骨子としているが、内容を大幅に加筆したものである。